

「節目を尊ぶ、人生は旅」

初春の今月には
気淑く風和
梅は鏡前の粉を披き
蘭は珮後の香を薫らす
万景集巻五梅花の歌三首并序
令和元年 青柳いづ

松榮山報

令和二年 新春号

これからの祭典行事案内

令和二年 節分祭

一陽来復、
年男年女募集

立春を翌日に控えた節分の日。今年の節分祭も子年生まれの年男年女の方々による豆まきを開催いたします。令和はじめて、そして十二支のスタートを切る子年の節分祭は御利益もことのほかかもしれません。軍靴の足音が徐々に緊迫度を増しはじめた昭和十一年生まれの八十四歳の方。さまざまな犠牲を払った大東亜戦争が終結して間もない昭和二十三年生まれの七十二歳の方。天皇陛下がお生まれになった昭和三十五年は国中が祝賀に包まれた六十年前のことです。陛下とともに歩まれた方々が還暦を迎えることになりました。終戦からわずかに四半世紀で日本が世界に冠たる大国へと発展を遂げ、我が国の円熟期になった昭和四十七年。そしてバブル期の昭和五十九年生まれの方々。さらに昭和から平成へと時代が変わり、今年二十四歳になられる平成八年のお生まれの方。そして十二歳になられる平成二十年生まれの方が令和最初の年男年女になります。

新たな御代の干支は小回りが利き利発な子年、多産ということも少子高齢化の日本が大きな力を蓄え富栄えますようにとの新たな願いを感じます。駆け抜けていった平成に思いを致しながら、今年の節分祭と立春を境にして令和の平和と、皆さんのますますの発展と健康をこぞって祈念いたしましょう。

豆まきであらゆる邪気をくじく。節分祭、特に年男年女にあたる方にとっては人生のお祭りのひとつです。毎年多くの皆様のご参加でひとときわ華やぐ節分祭。年男年女の方には裃衣装を着着。特別祈願で厄祓いをしてご加護と招福を祈願いたします。参拝のあとにはご社頭特設舞台から豆まきをしていただき、大勢の人々とともに初春を祝う節分の良き日をお待ちいただきます。

令和の節分、時代の大きな節目とともにめでたく年男年女に当たる方々のご参加をお待ちしています。

◎節分祭斎行日…
令和二年二月三日(月)

◎節分祭特別祈願祭…
令和二年二月三日(月) 午後三時から

◎豆まき…
令和二年二月三日(月) 午後四時から

◎初穂料…おひとり二万円
特別祈願料、記念撮影代、裃衣装貸出料含む

◎申込方法／護國神社にてお申し込みください

※尚、節分祭の一部写真は「松榮山報」に掲載されます。ご了承ください

また節分祭は毎年多くの方々に集まりいただき大変混雑いたします。ご近所の方はお散歩がてらにて、遠方の方は公共交通機関等をご利用ください

梅まつり
併催
大分泣き笑い
相撲大会

愛し子の健やかな成長を願う
護國神社吉例

よく泣き、よく笑う
元気な赤ちゃん大募集

行司…首藤健二郎氏

取組日時…令和二年三月一日(日)
集合の後、儀式殿前にて受付を開始いたします

取組開始時間…午前十時
取組場所…儀式殿特設会場

資格…生後六か月から一歳半までの赤ちゃん
男女児は問いません

参加料…赤ちゃんおひとりに付き三千円
参加者全員にお守りと参加記念品(特製はつぴ)をお授けします

申込方法…神社備え付けの用紙に必要事項を記入のうえお申し込みください

※尚、お振込の場合は振替票の控えを相撲当日にご持参ください。ご提示のない場合は失効となりますのでお気を付けください

申込締切…令和二年二月二十五日(火)まで

集合時間…当日は午前九時から十時までに儀式殿前にお集まりください

集合の後、受付をして順次お子様の健康祈願のお祓いを本殿でいたします

※尚、大分泣き笑い相撲大会の一部写真は「松榮山報」に掲載されます。ご了承ください

二月

月次祭
一日 午前九時から
節分祭
三日 午後三時から
紀元祭
十一日 午前九時から
祈年祭
十七日 午前九時から
天長祭
二十三日 午前九時から

三月

月次祭
一日 午前九時から
第二十六回
ぶんご梅まつり
一日 午前九時三十分から
春を告げる豊後梅が咲き競う境内。大分縣護國神社恒例の梅まつり。
「大分泣き笑い相撲大会」をはじめ趣向を凝らした神賑わいをお楽しみください。
春季皇霊祭遥拝式、春分祭
二十日 午前九時から
骨董市
二十一日・二十二日

四月

月次祭
一日 午前九時から
神武天皇祭遥拝式
三日 午前九時から
春季例大祭前夜祭
八日 午後七時から
春季例大祭
九日 午前十時三十分から

これからの祭典行事案内

大分縣護國神社

検索

http://www.oita-gokoku.jp



令和二年 新年を祝う 護國神社のお正月



大分縣護國神社宮司
八坂 秀史

令和二年干支の話「庚子」かのえね

謹んで新春のお慶びを申し上げひととせのお幸せをお祈りいたします。
終戦七十五年を迎える今年、靖國神社 大分縣護國神社に鎮まるみたまのいよいよ安らかならんことを祈念します。
昨年令和元年は御代替わりの年となりました。皇位継承に伴う諸儀式が行われるたびに、「令和」の二文字に日本の息吹きがその都度吹き込まれ、国ぶりが練り

込まれていくことを実感された方も多かったことでしょう。令和二年の日本が世界の中でより信頼され光輝放つ国家と成ることを願ってやみません。

昨年の干支は己亥（つちのと・い）でした。己と亥、何れも内に満ち満ちている力を、筋道を立てて次はどう伸ばすかを考える段階でした。今年は十干が七番目の庚（かのえ）、十二支が子（ねずみ）ですので、干支は庚子「かのえ・ね」となります。「庚」という漢字は「きね」を両手で持ち上げる象形」または「臼と杵を表した象形」或いは「植物の生長が止まって種を残す形」です。本質は変わらず新たな形に進化しようとする姿を表します。そこで「庚」は「更る（かわる）」様子を意味するようにになります。また十干と十二支は、ともに草木の成長に例えられます。植物は種から芽が出ますが、十干の最初の「甲」と十二支の最初「子」が種にあたります。「子」はヒトの幼いかたちを表しておりふえる・しげる意です。前年の「亥」の活力が十二支の最初に引き継がれることで、「子」の力がより盛んとなり

一気に芽吹きを迎えます。今年は、過去の成果の維持するものと刷新するものを見極め己を更新し新たな局面を切り拓く年回りです。

令和二年庚子の年を飛躍の時ととらえ、皇室を尊びみたまを偲び今年も心豊かな日々をお過ごしください。

《節目を尊ぶ、人生は旅》



令和の御代に替わって迎えた初めての新年。そして十二支のはじめ子年を迎えたお正月になりました。日本の神様が今年の寿ぎを定めてくださったかのように何もかもが新しく、まるで世の中を新調するかのような「重暈のお祝いの年」の幕開けになりました。

天皇陛下ご即位に日本中が喜びと祝福、そして感動に包まれた御大礼のあった昨年。諸儀式の厳肅さ。天気を嘉するほどに変えてしまう神々しさ。両陛下の麗しいお姿。そのすべてが国民にとっては誠に有り難いことばかりでした。

昨年の秋の御盛儀を目の当たりにでき、感動に心震えて間もなかった今年の初詣は例年以上の参拝者で賑わいました。社頭では大分高等学校書道部の皆さんによる今年の一文字「和」の書初めや、二目川神楽や鐵心太鼓の奉納などの神賑がお正月風景に花を添えました。

天皇陛下は天照大神のご子孫でいらっしやいます。陛下の一世一代の重儀の数々とお姿を拝した熱もまだまだ冷めやらないうちに迎えたお正月。私たちにとって両陛下をはじめとして皇室を身近にそしてさらに敬うことができたこと、そして日本には常に神様が在しますことをいつも増して感じている多くの参拝者で賑わいました。

御大礼で拝見することができた有職故実を昇華させたような数々の美しい日本の伝統文化。そしてラグビーワールドカップ日本開催を終えて、多くの国民が「日本人に生まれて良かった」と。また多くの外国人が「日本の伝統文化や皇室の存在は素晴らしい。日本人の精神の高さに改めて敬意を」と。国内外こそって称賛された一年でした。

日本には日本最古の歴史書である古事記があります。そこには天皇陛下の皇祖神である天照大神をはじめとして、神々が神々を産み国造りをされたことが力強く記されています。地上に降りられた神々、日本中にそのお力を知らしめすさまじき神々や祠が多く点在しています。日本は神様に強く守られています。神様と我々日本人が力を合わせることで国内外で何事かが起きようとも決してぶれることはないのです。

古事記の編纂から時代を経て奈良時代末には日本の四季折々の美しさや人々のさまざまな気持ちや日々の暮らしを表現している、万葉集という世界に比類なき和歌集が生まれました。令和の元号もこの万葉集から出典されました。元号が初めて日本の古典に由来したのでした。これほどに令和の時代が我々国民にとって身近であり、そして大切にせねばならない深い意義があると言えます。

自然災害のないように。争いのないように。平和な日本でありますように。
神明にご奉仕する大分縣護國神社神職一同、今年一年が皆さまにとりまして穏やかで健康でありますように。そして麗しい私たちの国日本の弥栄をお祈りいたします。



祭典行事報告

御英霊のご遺志を継承するために

高くそびえ立つ護國神社の巨大縁起物。この日の青空は大破魔矢や大熊手の設置を寿ぐかのような美しさでした。老若男女、多くの皆さんが集まるなかで縁起物設置のお祝いにお菓子まきをを行い、宙に舞うとりどりのお菓子を授かろうと笑顔と歓声が混じったご社頭は大いに賑わいました。縁起物は初詣の人々を迎え、そして新しい年がますます良き年になるようにとの大きな御利益をおわかりするような有り難さがあります。



縁起物お披露目 十二月八日



春夏秋冬、松榮山に佇んでいる護國神社のお社。木々に囲まれた神域は他の場所とは異なる清浄な聖域です。そこには「何ごとかがおまします」の気配が伝わってくるほど清らかです。そのような神社に於いても一年間風雨や気温の変化に耐え、そして塵などによって汚れてしまします。神様にも気持ちよく新年を迎えていただきたいという思いで忌竹を使って本殿などを払い清めました。この日、奉仕の方三十五名の手によって拝殿には新たな大しめ縄が架け替えられました。

御煤払、大しめ縄架け替え 十二月二十五日

いよいよ新年まで数時間を切る大晦日の夕刻に師走大祓式が執り行われます。六月三十日の夏越大祓式は深緑のなかで何やら瑞々しさを感じる儀式ですが、師走大祓式は暮れなずむ時間と暮れゆく年を体現できる非常に幽玄な気持ちになります。知らないうちに身についてしまった一年間の悪しきこと。日本人は半年ごとにリセットすることによって新たなスタートを試みる心構えを持っています。大晦日の大祓は一年間を顧みる儀式でもあります。



師走大祓式並びに除夜祭 十二月三十一日



お正月気分がまだ残っているとは言え、ぼちぼち生活も仕事も始動せねばならない七草あたり。気持ちと体がうまく合致できないようなもどかしさがありますが、発奮せねばなりません。いにしえの人はそんな頃合いを見計らって春の草々の香気があふれ、野の滋味が身体中に行き渡るように七草粥のお祝いを暦に入れました。護國神社でも毎年恒例の七草粥の振る舞いを行い、添えられた福梅とともに大勢の方たちに喜んでいただきました。

七草 一月七日

祭典行事報告

大分市菊花展 十一月二日～十三日



丹精込めて育てられた菊の花。美しさと豪華さ、そして可憐さを品種ごとに楽しませてくれました。清々しい香りがご社頭を包みました。高貴な花として古くから日本人にとってなじみの深い花ですが、今年は特にご即位に関連して天皇陛下のお側近くにあった菊の御紋を目にすることができたのではないでしょう。か。皇室の御紋として、また英霊をお祀りしている靖國神社や護國神社の神紋として、まさしく日本国のシンボルの花です。

大絵馬除幕 十二月一日



令和二年の干支は子。ご社頭に据えられる大絵馬の除幕式十二月一日がやってくると神社でもいよいよお正月準備が本格化してきます。年末や年越しの祭典行事も目白押し。お坊さんが忙しいという由来の「師走」同様に、神職さんたちも駆け足するように大わらわです。毎年大絵馬の除幕にワクワクしながら見守っている皆さん。次の干支を知りながらも新たな干支はどんなだろうと、子年の大きなねずみの絵にあやかっけて良きことがありますように。

大分市遺族会 十二月三日



この日、大分市遺族会の総勢十一名の皆さまが親睦バス旅行で護國神社に参拝、境内の散策をされました。十二月らしい寒さのなかにもかかわらず、言霊記念館横にある旧航空廠にあった銃痕跡の残る鉄扉や西南戦争戦没者の墓地、満蒙開拓義勇軍慰霊碑、招魂斎庭、展望台などを見学されました。大分市内のご遺族にとつて護國神社は身近なお社ながらも欄宜の案内に改めて思いを深くされたようでした。

臨時仕女研修 十二月七日



お正月の護國神社初詣はおよそ三十万人。そのほとんどの方たちが破魔矢やお札やお守りを授かっています。神様をもっとも近くに感じるお正月だからこそ新しい授与品を家の神棚に納めたり、お守りを常に身近にしたりして気持ちを新たにしています。多くの参拝者にスムーズに授与品をお渡しし、気持ちよくお正月気分を味わっていただくよう今年も多く臨時仕女が研修を重ね、正月期間中手際よく対応してくれました。

令和御大礼記念釣灯籠奉納御礼

御代替わり、そして御大礼の御盛儀をお祝いして記念釣灯籠のご奉納を募っておりましたが、昨春秋にはご遺族崇敬者、個人や団体の皆様からご奉納いただきめでたく新しい御灯がとまりました。

拝殿の深い軒に新たな釣灯籠が吊るされ夕刻になると美しい光を放っています。その灯りは英霊をお慰めする浄火の灯りでもあり、英霊が御心安らかに鎮まっている証のような優しい灯りでもあります。

令和の時代の平安を見守る大切な御灯りとして末長く守り続けてまいります。

茲にご奉納いただいた方々のご芳名を謹載し心より御礼申し上げます。

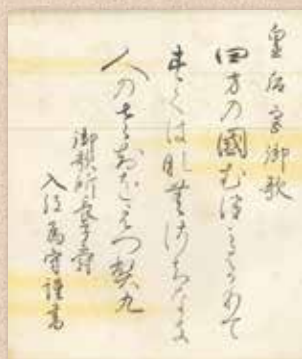
大分県遺族会連合会、日本製鉄株式会社大分製鉄所、大協会、佐伯市遺族会連合会、竹尾和子・英昭、中島征夫・美千代、明治大分水路土地改良区、安藤元博・保子、株式会社ミカサ、森竹吉春・らら、大津公成、株式会社渡辺工業、山田宗義、三浦清一、株式会社ニッショ―（敬称略）



巡り会いは不思議なものです。それは人も物も同じではないでしょうか。小職は、大学生時代日本中世史を専攻しておりました。高校生の頃成績で褒められるものは社会科のみでした。歴史が好きで特に日本史は大好きでした。それ故に大学では歴史学を学びたいという思いに駆られ皇學館大学の門を叩きました。日本史の中でも平安時代末から安土桃山時代にあたる中世という時代区分に大変興味を持ちました。それは今でも時折食事をする指導教授の影響が大きいと思います。掛軸や陶器などの骨董が大好きでその上茶道にも造詣が深く教授の研究室には常にその関係者がいて、私も直に骨董品を眺めたり手に取ったり時には茶器として使い歴史の断片を感じていました。

現在小職も恩師の指導の御蔭が骨董品が好きで、ネットオークションや入札カタログをよく見ます。特に心惹かれるのは和歌の懐紙や短冊です。顔に似合わないのですが、仮名文字の優美さ繊細さに憧れているところがあり、ついつい入札してしまいます。今回入江為守氏（子爵、昭和二年に皇太后大夫に就任、昭和天皇の侍従長を務めた入江相政氏は三男。相政氏は昭和四十一年昭和天皇皇后両陛下御親拝遊ばされた折同行しておられます）の和歌の色紙を落札したのですが、雅な色紙に麗しい仮名文字が書かれており、とても心が弾みました。「皇后宮」と最初に書いてあるため、昭憲皇后様が貞明皇后様が香淳皇后様だろうと思いましたが「四方の国」との五文字が「四方の国」と

読め、読める仮名文字をつなぎ合わせ、読めない仮名文字は辞典を引きながら何とか解説すると「四方の国むつみはかりて すぐわなむ さちなき人の さちをえつく」と読めました。御歌をインターネットで検索すると、貞明皇后様が日本赤十字社に下賜された御歌だと分かりました。御歌を日本赤十字社が東京音楽学校に作曲を依頼し、御歌「四方の国」は日本赤十字社の式典やその教育機関の入学式・卒業式や戴帽式などで現在なお歌われ受け継がれています。当神社の春秋例大祭には日赤看護師同方会大分県支部長秋吉信子氏に常々御参列を頂いております。昨秋の大祭では式服を着用して頂き、凛とした姿に自衛隊の方の制服姿とともに例大祭に良き風を吹き起こして頂いております。今年の春秋例大祭に御参列頂いた際に、御歌「四方の国」を拝聴できればと思いますのでお待ちしております。（了）



令和元年秋の叙勲のご報告とお祝い

当大分縣護國神社に責任役員として多大なるご尽力を賜っております荒金一義様と岩男立夫様が、県内において様々な分野での活躍を認められ昨春秋に叙勲の栄を賜りました。

茲に衷心よりお祝い申し上げ、ますますのご発展を祈念申し上げます。

旭日双光章



一般財団法人
大分県遺族会
連合会会長
岩男 立夫 様

旭日双光章



大分市自治委員
連絡協議会会長
荒金 一義 様

【略歴】

昭和41年 岩男組設立 社長就任
昭和47年、平成7年 院内町議会議員
昭和61年 財団法人大分県遺族会連合会理事
平成4年 財団法人大分県遺族会連合会副会長
平成9年 株式会社岩男組 会長就任
平成10年 大分県戦没者遺族相談員就任

【受賞歴】
昭和62年 全国町村議長会長表彰（地方自治功労者十五年）
平成6年 財団法人日本遺族会長表彰（役員援護事業功労）
平成10年 全国団体指連合会長表彰（全国団体指功労）
平成12年 大分県知事表彰（教育文化スポーツ関係功労）
平成13年 厚生労働大臣表彰（援護事業功労）
平成15年 文部科学大臣表彰（体育指導委員功労）

【略歴】

昭和40年 荒金酒店代表
平成21年 大分中央地区防犯協会連合会会長
平成23年 大分県防犯協会理事長

【受賞歴】
平成12年 熊本国税局長表彰
平成19年 大分県文化の日表彰（治安維持・安全）
平成27年 全国防犯協会連合会会長表彰 防犯栄誉金章
平成29年 全国自治会連合会会長表彰 総務大臣石田真敏 地縁団体功労表彰（地方自治）
令和元年 警察庁長官表彰 警察協力章



靖國神社 「さくらの陶板」



昨年、靖國神社創建百五十年を記念して外苑参道慰霊の庭に全国四十七都道府県それぞれの陶工たちの手によって作られた「さくらの陶板」のモニメントが完成しました。

桜の花と言えば英霊や靖國神社の代名詞、そして古来より私たち日本人がもっとも愛し身近に感じている国の花です。

英霊たちが生まれ育ち、もしかしたら歩いたかもしれない故郷の山の道。かすかに亡き人たちの生の余韻が残っているかもしれないその土を用いて、こねられ形づくられ、そして窯で焼かれ無から有へと命をつないだ陶（やきもの）。

北海道から沖縄まで全国の焼き物の里で作られた土地土地の特色を表した桜の花の陶板が、外苑入り口から本殿へと参拝者を導き奥へ奥へと招じるかのように建てられています。各地を代表する窯元、陶工たちが故郷の特色を生かした四十七姿の五弁の桜。季節を問わずに咲き誇り、英霊をいつまでもお慰めしていくことと思います。

大分県のさくらの陶板は日田市小鹿田焼です。懐かしい大分の空や山の景色が大分に縁のある英霊たちに必ず届くはずで。英霊たちにとって遠い故郷の香りがご自分たちが眠る東京の中心、靖國神社に奉納され、これまでも増して日本を、そして全国津々浦々のご遺族をお守りくださることと思います。

